

一室の一面にして能登の海 夕陽を引つ張り入れて
ゐるなり 花 美月

夕陽かがやく能登の海が、旅館（あるいはホテル）の窓一面に広がっている。「夕陽を引つ張り入れて」いるのは、文脈上、能登の海ということになる。強力な引力を發揮する不思議な海が読者の前に一面に広がる楽しさ。

しぼんだりふくらんだりする球体になって眠っているハリモグラ 佐佐木定綱

「球体になって眠っているハリモグラ」だけだったらどうっていいことのない表現だが、そこに動きをもたらしただけで、うまい。しかも動物の動きとは思えない、無機的な動詞を用いてヘン感を強調している点が特色。

勉強の合間に柘榴食む子ありあすっぱいと計算に
戻る 真壁かほる

場面は小学校の教室、あるいは算数の塾だろうか。休み時間に柘榴の実をとってきて、机の上に置いてときどき口にいられているらしい。下句の何事もなかったような、「……に戻る」の可笑しさ。

若き日の悪行はかく美しく『酔ひどれ船』を読み返
しをり 野原亜莉子

『酔ひどれ船』は、ランボー十六歳の時の有名な長編詩。自身を難破した船に見立てて、漂流と帰還をうたう難解な一編。「読み返しをり」に十代の若き美しき日々への郷愁が読める。

新人であることまことに窮屈で総帆展帆したき秋晴

短歌の現在

No.453 今月の15首を読む

佐佐木幸綱

れ

職場が変わって、新人として勤務するようになっての感慨。新しい職場でなんとなく遠慮がちに身を縮めるような感じで勤務しているのだろう。「窮屈」↓「総帆展帆」という一氣に展開するスピード感。「総帆展帆」という語をうまく用いた。「総帆展帆」は日本丸の写真などで見るような、帆船がすべての帆を広げること。

オープンが一番親分「早く出せ」とブザーが鳴れば
まず飛んで行く 佐久間得幸

何と言っても「オープンが一番親分」が可笑しい。パン屋さんにとってはオープンが親分なのである。「オープン」と「オヤブン」の語呂合わせも。むろん意識されているのだろう。

ゆくりなく浜にて出あふ鷹柱おーいと呼べば崩れさ
うなり 児島昌恵

秋の季語である「鷹柱」は、鷹の渡りの際などに、上昇気流にのって何羽もの鷹が竜巻状に旋回上昇する現象。大がかりなものは百羽も二百羽も集まることがあるらしい。ここはそんな大がかりな鷹柱ではなさそうだが、何羽か、何十羽かの鷹だったのだろう。下句の童心にかえた感じが楽しい。

夕ぐれの横浜港へゆつくりと近づくと灯り離れる灯り
今井洋子

どこか地上の高所からながめているのかも知れないが、飛行機から見おろしている場面と読んだ。動きつつ